

飛耳長目

通巻161号 平成29年4月1日発行

「修身教授録」探求（第二百二十五回） 恩師の「じょうぶも」（その二）

森信三

■超偉大な言語に尽くせぬ先生

さて今日はいよいよ西先生のことをお話し申すこととなりました。しかし今ここで学校の授業の時間としてお話し申すという程度では、もちろん先生のお偉さの片鱗すらもお伝えすることはできないでしょう。がしかし既に、「恩師のことども」として福島先生のことを申した以上、西先生のことを除くというわけには参りかねますゆえ、とにかく一応のことをお話し申すことにいたしましょう。しかしそれによって先生のお偉さが尽くされないうという事は、あらかじめ十分ご承知おき願いたいのであります。実際先生のお偉さについては、ひとりこの時間を以てしては不十分であるというのみでなく、おそらくはいかなる方法をもつてしても、如実に先生のお偉さの全体をお伝えすることはできないでしょう。いや、ひとり諸君にお伝え得ないばかりではなく、実はかく申す私自身も真にその全貌を窺う事はできないのであります。実際先生のお偉さを真に知るためには、何よりも私自身が今後開かれゆく人生の後半生のすべてをそれに捧げるでなくてはなりませんまい。

■広島高師での出逢い

さて私が初めて先生の名前を知ったのは、実は愛知師範の四年生の頃でありました。そ

れはいつか「旧師のことども」と題してお話しした例の八木幸太郎先生から伺ったのでありまして、八木先生はあるとき修身のご授業の際「広島には西という倫理学者がいる。ストイック風の学者でグリーン倫理学の訳がある。もし諸君が自分は頭がいいと自惚れ心が起こったら、あの本の最初の10ページか15ページを読んでみたまえ」と言われたのがそもその初めでありました。そうして私の心には、その時すでに俗世を超絶せられた先生の高風がかすかながらも種蒔かれたのであります。しかるにその後縁あって広島高師に学ぶことになりましたので、先生のお名前は入学と同時にいろいろの方面から伺っていました。しかし私が直接先生の御授業を受けるようになりましたのは、高師の三年と四年との二カ年でした。もちろん当時の私といえども、御授業を受けつつ何とはなしに、先生のお偉さはそのご風貌からも窺い得たわけでありましたが、しかし当時の私には、先生のお偉さの真の内容をはつきりとつかむことは到底出来がたいことでありました。と申しますのは、一方からは私の高等師範時代の生活は、前にもお話ししたように福島先生に対する尊敬によつて貫かれていたせいもあります。同時にまた根本的には、私自身がまだ西先生の世界を窺い得るまでに成長していなかったからであります。そこで私の在学中先生の御書物としては処女作の「倫理哲学講話」と二番目の「普遍への復帰と報謝の生活」とが出ていました。もちろん求めはしたものの、いずれも初めの方をほんの30〜40ページくらい読んだだけでやめてしまったものです。すなわ

ネット検索 森信三先生と修身教授録

ちそれほど当時の私の頭は幼稚なものでした。もっとも私の友人の中には、当時高師在学中からすでに先生を尊敬して、親しくお宅へも伺い、教えをいただいていた人もありましたが、私はまる四年間広島に学びながら、ついぞ一度も先生のお宅の敷居をまたいだことのない人間であります。ただ散歩の折り、泉邸という浅野侯の名園の近くにあった先生のお屋敷のそばを通るときには、昔の士族屋敷そのままの古風な草葺きのお家から、梅の老木が塀の外へ出ているところなど、いかにも哲人のお住まいに相応しいなどと感じながら、心ひそかに仰ぎすぎる程度だったのであります。

■京都大学入学後初めて分かったこと

しからばそのように愚かだった私が、そもそもいかなる動機によって、先生のお偉さに目覚めるに至ったかと申しますと、それはひとえに私がその後京都大学の哲学科に学んだお陰であります。それ故もし私が京都大学に学ばなかったとしたならば、あるいは終生先生の真のお偉さに目覚めなかったかも知れません。いやおそらくはそれに相違あるまいと思っております。かく考えてまいりますと、私が京都大学によって与えられたところもまた実に大いなるものありと申さねばなりません。

さてそれは大学に入ってからどうして先生のお偉さに目覚めたかと申しますと、もちろん以前から西先生は京都の西田博士とともに日本の持つ二大哲学者であるということはしばしば耳にしていたことであるます。しかも凡人

の悲しさには、やはり大学へ行けば学校の格式が一段上だけに、いろいろ偉い先生方がおられるかに考え入ったのであります。さていよいよ入ってみますと、西先生ほどのお方は20人に近い教授中、ただ一人西田先生あるのみでありまして、その他の方々はこう申すのはいかがかと思いますが、西先生に比べますと何れも見劣りのする方々ばかりでした。特に先生御専攻の倫理学担当の方の講義などは、先生のお話を聞きしてきた耳には、まことに聞きづらいものでした。

ここに至ってさすがの私も初めて愕然として心の芽が開けかけたのであります。あれほどお偉い方に学びながら、ただ漠然と大学に行きさえすればそれ以上の方々にでも学び得るかに思っ、さ迷うてきた自分の愚かさについて初めて気づき出したのであります。と申すのは当時高等師範には二カ年の専攻科というのが設けられまして、そこへ入りさえすれば引き続き西先生に学ぶこともできたのに、私はわざわざそこを去って京都に学んだのでありますから、私の慚愧の念は一入深刻なるものがあつたのであります。

私をしてこの念いをさらに一層深からしめたものは、大学一年の終わりが、先生の力作「倫理学の根本問題」が世に出たことでもあります。私はこの本を店頭に見出すや直ちに一本を求めて、馳帰って一気に食るように読んでしたのであります。そうして初めて先生のお偉さの程が分かりかけたのであります。

総じて思想家の真の偉さを知るには、どうしてもその方の全著作を読破しなければなりません。その方の書物すら未だ十分に読まず

して、「あの人は偉い」と言うてみるところで、それは浅薄な主観的感情の域を脱するものではありません。いやその方のお偉さを真に知るためには、ひとりその全著述を読破するのみならず、さらに進んでその方の行ぜられるが如くに我が身も行ってみるでなくてはなりません。さればその方の全著作を読むという事は、わずかにその出発点に過ぎないのであります。

しかしながら在学中の私は、西先生と西田先生とその何れの道に従うべきか、未だ本学の腰が決まらなかったものであります。そこで大学の専攻科にご縁ができたのを幸い、初めの3年間は西、西田先生の御書物を平等に二時間ずつ並べ用いたのであります。しかるにかくすること3年の後、私はわが国の国民教育者の根本信念を培う哲学としては、どうしても西先生によるの外か無いことに、ようやくして心の腰が坐つたのであります。かくして自分の生涯をかけて先生の足跡を辿るべく初めて心からの決心がついたのであります。顧みれば広島で初めて先生に学んでから、この決心に至るまでには、まさに10年近い歳月をさまよって来たわけでありまして、諸君はこの一事によつても、私という人間がいかに鈍根であり手間のかかる人間かということが多少はお分かりになったことでしょう。実際我ながらあきれかえるほどであります。もちろん京都大学を出ながら、一世を風靡する大学的な学風から離れるということとは、いわゆる現世的な功利打算から申せば、はなはだ拙劣な道であります。私が大学卒業後ここに

13年、常に学問への希求の念いを懐きつつ、ついに今日まで学問をするに適した位置の恵まれないのも、多少はこの点に基因するところがあるかもしれない。しかも学問の道は私にとつては実に生命そのものの道であります。したがってこの生命の道の前には、現世的な功利もついにこれを捨てざるを得なかつたのであります。私が人生の歩みにおいて些かでも自ら立つことのできましたのは、全くこの決心覚悟が決まってきたことでありまして、これを年齢の上から申せばまさに35才前後のことであります。爾来私はそれまであれこれと覗いてきた西洋哲学史上のさまざまな思想家の世界から一時身を引いて、まずこの現代に生き、しかも自己にとつて因縁浅からざる一人の思想的偉人の世界を身をもって探ろうと決意を固めたのであります。爾来今日まで十年近い歳月を、私は全くこの一筋の道を歩み来たつたと申してよいのであります。

■超凡な人格の西先生

以上は西先生のことをお話ししようと思いつつ、結局どうして私が先生を生涯の師と仰ぐに到つたかということをお話ししようと思つたのであります。そこで残された問題として、先生が学者として思想家として、現在の我が国においていかなる地位をしめられる方であるかということ、この事はさらに突き詰れば、結局先生は我が国の思想上において、いかなる位置を占められるお方であるかというところまでゆかねばならないでしょう。しかしかような大問題については、ここで

その詳細を申すことは到底出来ることではありません。しかし諸君の将来を思つてその結論だけを申すならば、先生は我が国現代の持つ最高の国宝的学者であつて、我が国の明治維新前までに発達した学問の伝統は、先生において、最も本格的に継承せられつつあるのであります。おそらく先生ほどに卓れた御素質の方は、これを古人の中に求めて中江藤樹先生以外には容易にその比を見いだし難いでありましょう。

さらにもう一つの残されている問題は、先生の人としてのお偉さということでありまして、この方面についても私は、今日まで先生から教えを受けること実に莫大なるものがあるのであります。それ故今その種のことを申せば、それだけでも一時間や二時間直ぐたつてしまひましょう。しかしもう時間も参りましたので、最後に先生のお人なりを窺うべきことをただ一つだけ申しておきましょう。それは先生は非常に手紙の御返事の早い方だということであります。そうしてこの点、私のわずかの文通交遊の範囲内で、先生ほど手紙のお返事の早い方はないのであります。そこでもしご返事を頂くべき手紙を差し上げて、すぐご返事が頂けなかつたなら、おそらくご出張か何かでお宅にはおいでにならぬものとお察ししてかかつて誤りが無いのであります。若い諸君にはかようなことを申してもおそれかそれほどの感動も与えないでしょうが、しかしこの一事実、実に容易ならぬことでもあります。そしてそれがいかに容易ならぬことであるかという事は、もし諸君にして今後10年20年の歩みにおいて、精進怠りなくんば

次第に分かつてくることでありましょう。では時間が参りましたので念いは尽きませんが、けれど、これまでといたしまししょう。

（小林雅敏記）

森信三先生の学問を研究するとき、このような師への葛藤・迷いがあつたとは。京都大学入学27才、大学院卒業35才。その年に天王寺師範の専任講師拜命。それからさらに三年間。迷いつつ修身の授業を西・西田両恩師の著書で開始したが、ついに著書をも離れ、独自の講義を開始し、その記録を生徒に依頼する。その頃から、国民教育の根本は西哲学の継承と発展にあらん、との学問に対する腰が決まつた。（二繁）

朝鮮動乱の収束考（微言）

森信三

○朝鮮動乱は米軍の果敢なる仁川上陸と、それによる首都京城の奪回という冒険的戦略によつて、一挙に大勢挽回し、今や完全に勝敗処を異にするに至つた

○このことによつて、一時はこのまま第三次世界大戦に発展するかもしれぬと懸念された憂慮も、一応は解消して全世界に深い安堵感を与えつつあると言えらるであらう。

○まことに朝鮮動乱が、第三次世界大戦に発展しないで、少なくともそれに対して小休止を与えそうな見通しのつきかけたという事は、朝鮮と直接連換の深い我が国はもちろんのこと、人類そのものの為にも真に慶賀すべきことと言わねばならぬ。

○朝鮮の動乱が我々人類に与えた警告と教訓については、真に絶大なるものがあると言つてよからう。特にそれが直接関係者たる米ソ

両国に与えた教訓に至っては、おそらく言語を絶するものがあるといふべきであろう。

○米ソ両国はこれによって果たしていかなる現実の真理を学びとったであろうか。米国が朝鮮動乱を契機として、一切を准戦体制に切り替えた事は、周知の通りであるが、鉄のカーテンの彼方においても、おそらく同様のことが行われつつあるに相違ない。

○朝鮮動乱が第三次世界大戦を予兆する事は言うまでもないが、見る人によってはさらにそれを象徴し縮訳するとも言えるかもしれない。すなわち我々は、ある程度まで、第三次世界大戦の性格と帰趨とを予知することができるとも知れない。

○朝鮮動乱の教えた教訓は無数にあるが、海と陸とのそれぞれ性質を異にする力が、今度ほど深刻切実に教えられた事は、おそらく人類史上空前といふべきであろう。

○中共の立場からの、台湾攻略の困難さと鴨緑江渡河の容易さとは、如上の真理を最も有力に物語っている。しかもその容易なるべき鴨緑江渡河の行われそうにないのは、米空軍による生産工業地帯の徹底的爆撃が恐れられたることであろう。

○陸と海と、そして空と。この三者の関係がこれほど緊張して考えさせられた戦争は、その規模こそさほど大きくないとは言え、全く空前と言つてよいであろう。

○朝鮮動乱の帰趨の大体見通されかけた今日、我々日本民族としても、考慮すべき幾多の事柄があるであろう。そしてその第一は「もし今回米国が立たなかつたならば」ということである。

○もし今回米国が立たなかつたと仮定するならば、北鮮軍の全南鮮占領は、おそらくは一ヶ月前後で完了したことであろう。その時わが国は一体どういふ立場に置かれたであろうか。このことは今日頭で考えたり想像するよりも、はるかに深刻な結果を招来すべき事は改めていふまでもあるまい。

○更に一步を進めて、その時対馬海峡がもし海でなくて地続きだったとしたら、いかがであるか。それによつて惹起せられる混乱は、太平洋戦争終了時のそれよりもさらに深刻激甚であるであろう。

○第二に考慮すべき点は、米国が今爾朝鮮動乱には原爆を使わなかつたということである。我々はこれを、もちろんアメリカのヒューマンイズムによるというような甘い解釈をしようと言ふのではない。

○しかしとにかく事実として原爆を使わずして事をここに終局せしめんとしつづつある事は、看過することを許されない一重要点である。すなわち今回の戦いは米国にとつて未だ真の本格戦ではないといふことである。

○同時に今日までソ連および中共が介入しないことの最大原因も、おそらくはまたこの原爆の威力によるものと言つてよいであろう。あるいは正確には原爆を頂点とする米国の科学力のせいと言えるであろう。

○がしかし今回の朝鮮動乱の教えた教訓のうちには、地続きの持つ強さとか、頭数というような最も素朴な現実的真理のあることも、この際決して看過してはならぬと思う。

○欧亜大陸を地続きによつて押さえているソ連側の強みと、世界最大の人数を要する中京

と握手しているソ連側の強みは、朝鮮動乱の一応の終結を以てしても、決して消滅するものではないことを知らねばならぬ。

○世界史としての神曲は、今や朝鮮動乱に対して一応の小休止を令ずるやに見られるが、しかし神曲が世界史である限り、その展開の終期はない。我々は朝鮮動乱の一次的鎮静という小休止の後に來たるべきものに対して、活眼を開いてこれが予見と考察等を怠つてはならぬと思う。

（「開頭」43号 昭和35年10月5日発行 10月号）
朝鮮半島問題は今なお新しい段階に入っている。森信三先生の論考のその根本は、未だに新鮮ではないか。いまや極論すれば、「核」戦争に突入の危惧なしとはしない。（二纂）

あとがきに替えて

森信三先生の学問が、中江藤樹の学問観を西晋一郎先生が継承し、その後森信三先生がこれを承け発展なさり、「全一学」体系を発表されたことと理解したい。森信三先生の学問はひとり学校の教師のみならず、市井の碩学にも機会あれば進んで出逢い、その学風に親しんで受け入れられた。森信三先生は幾人もの広範な先達の学問領域をカバーされていると思う。（29日二纂）

〒633-0003
桜井市朝倉台東2-538-89
電話 0744-4513422
Email: hji3@ken.jp
http://web1.ken.jp/syushin